

# 聖母小だより

令和6年2月1日

2月号

桜の聖母学院小学校

## 『マルグリットの晩年』

学院宗教主事：シスター鶴野 篤子



去る1月12日は、学院の創立者 聖マルグリット・ブールジョワの祝日でした。カトリックでは、聖人が亡くなった日を祝日とします。

マルグリットの最晩年は、加齢による疲労と孤独のうちに悲しみを体験しなければなりません。開拓当時から共に働き、労苦を分かち合った人々が、今は亡き人となっていました。その上にかつてなかった程の苦悩を味わうこととなります。

一人の姉妹、シスタータルディが、「自分は天から啓示を受けた。マルグリットは地獄に墮ちる罪の状態にある。」と主張し始めたのです。マルグリットは、自分は神の前に不忠実で責任を十分に果たしていないと自責の念にかられ、シスタータルディの言葉をまともに受け取ってしまったのです。マルグリットは次のように書いています。

「私の苦しみは言葉で言い表せないものでした。50ヶ月以上も苦悩にあえいでいました。」と。シスタータルディの言葉に3人の司祭が巻き込まれ、問題を複雑にしました。マルグリットは孤立し、深い闇の中にいました。

この苦しみからマルグリットを解放したのは、パリのスルピス会総長トロンソン神父でした。一人の司祭が事の次第を手紙で知らせていたのです。トロンソン神父は迅速に動き、3人の司祭とシスタータルディをフランスに召還したので問題は解決しました。修道院を根底から揺るがした問題が解決し、念願だった修道会会憲がローマから認可され、姉妹たちは正式に修道女となる誓願を宣立し、喜びと平和が戻ってきました。

病床にあった若い修練長のシスターが臨終だと知らされたときに、マルグリットは、深いため息をつき、「ああ主よ、若い姉妹ではなく私を逝かせてください。私の役目はもう終わりました。」と祈りました。この時からマルグリットは病に倒れ、病状が悪化していき、修練長のカトリーヌ・シャルリが回復し始めたのです。このできごとから、マルグリットが若い姉妹のために自分の命を捧げたという考えが広まりました。1700年1月12日の朝、マルグリットは穏やかに天の御父のもとに召されました。享年80歳でした。

## 今年度もご協力に感謝！

- ★1月10日と11日の二日間、第2回募金活動が行なわれました。この期間の金額は、円でした。昨年12月の第1回と合わせますと、円になりました。
- ★一昨日、活動の中心となっている奉仕委員会からのお便りの通り、今年度の送付先は右の表の通りに決まりました。ご家族皆さままでこの募金活動に取り組んでくださったご家庭もあったとのこと。保護者の皆様方の心温まるご協力に感謝いたします。

	送り先	金額
①	福島民友愛の事業団 (能登半島地震義援金含む)	
②	福島民報社 (能登半島地震義援金含む)	
③	CND アフリカの学校建設のため	
④	CND 中米の子どもたちの教育のため	
⑤	カトリック児童福祉会	
⑥	カリタスジャパン	
⑦	日本ユニセフ協会	

## 第3回ベルマーク作業：ベルマーク委員会

《日時》・・・2月17日(土) 10:00~11:30  
 《担当学年》・・・3, 5年生  
 《場所》・・・受付で確認してください。  
 ・他学年で今年度の作業に欠席された方は、今回の作業に参加して下さい。(学校側担当：湯川)

## 第3回資源回収：環境委員会

《日時》・・・2月17日(土) 7:30~8:30  
 《場所》・・・児童玄関前  
 ・登校(園)の時間帯と重なります。自家用車で搬入される場合は、くれぐれもご注意ください。(学校側担当：加藤)

## お詫びと訂正

聖母小だより1月号掲載「ふくしまジュニアチャレンジ」アイディア部門金賞受賞の「獣害グループ」のメンバーに未記載がありました。ここにお詫び申し上げますとともに、改めて金賞受賞「獣害グループ」メンバーを記載させていただきます。

正)

## 授業料の引き落とし：事務局

《引き落とし日》・・・2月13日(火)

※2, 3月分まとめての引き落としになりますので、ご承知おきください。

## おめでとうございます～国語科～

- 第11回「今、あなたに贈りたい漢字コンテスト」小学生部門 佳作…3年

## 下校時刻変更のお知らせ

- 3月19日(火)「3学期休業日」  
 ・下校時刻・・・14:20  
 ・下校SB発車時刻・・・14:30  
 ・牛乳なし  
 ・パン販売あり

## 幼稚園 2月「さくらんぼクラス」

0歳から入園前までの子どもたちが集い、親子で自由に遊びます。(※予約制)  
 ●期日… 1日(木)・19日(月) 22日(木)・26日(月)  
 ●時間…10:00~12:00  
 ※1回につき200円(保険込み)

## ミニコラムNo.50

## 『優勝の味』

1年担任：佐藤 勇作

東京ディズニーランドと同じ年齢ですが、未だに細々とサッカーを続けています。今シーズンは、県の2部リーグ(社会人)で優勝することができました。大したリーグではありませんが、記憶にないほど久しぶりに優勝できたので、自分が思った以上に感情が高ぶりました。優勝を決める最後の試合は、負けられないというプレッシャーの中、ヒリヒリとした緊張感のある試合でした。アドレナリンも出ていたのかいつもより体が動き、わくわくした感覚でプレーができたので、試合中は苦しさ以上に楽しさと嬉しさを感じていました。試合後は、歩くのも辛いほどぐたぐたになりましたが、この年齢になってもこういった経験や感情を味わうことができたのは、自分にとって大きな刺激となりました。

サッカーで初めて優勝を経験したのは、中学2年生の時の県大会です。準決勝のロスタイムに逆転ゴールを決めて、先輩方にもみくちゃにされたのを今でも鮮明に覚えています。次の日の新聞には「小さな秘密兵器のジャンピングボレー」と載っており、『小さな余計だな。』と思いながらも嬉しかったこともよく覚えています。その試合の勢いのまま決勝戦も勝ち、優勝することができました。それまで、準優勝や3位は経験していましたが、優勝したときの胸の奥から感じる喜びとは比べ物になりません。優勝の味を知ってからは、またこの感情と感覚を味わいたいという思いで、必死に練習に取り組んでいました。

子どもたちにも、自分がやると決めたことには1番を目指してほしいという思いがあります。スポーツでも勉強でも、その他の分野でも何でもいいのです。その思いが、自分の力を最大限に引き出してくれると私は信じています。一度きりの人生です。オンリーワンも大事かもしれませんが、ナンバーワンの味もぜひ知ってもらいたいです。



ゴールに向かってボールを蹴る少年時代の勇作先生